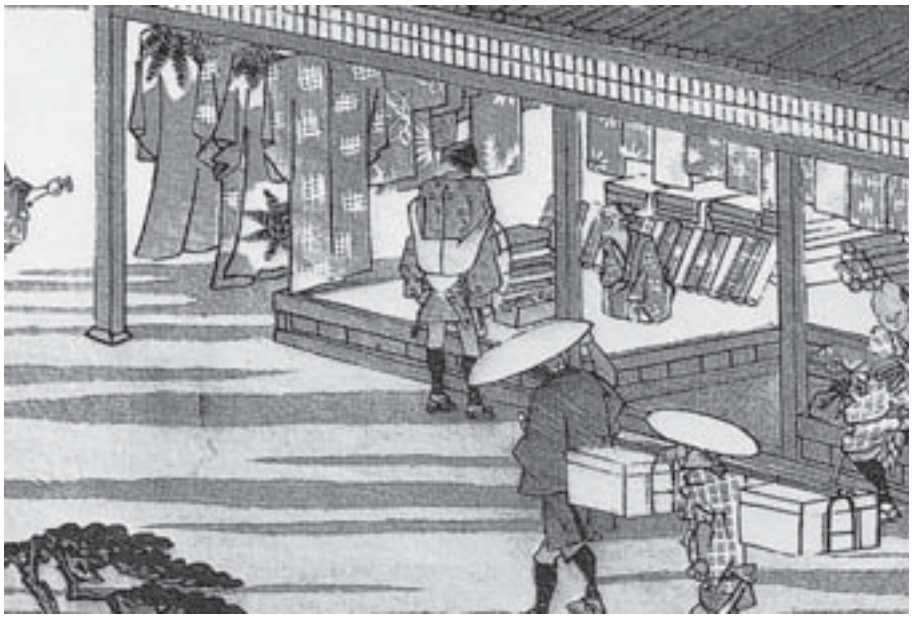
有松・鳴海絞（愛知県絞工業組合）

“光の波動”に着目した「新しい絞り」を世界へ

社団法人中部開発センター
客員研究員　坂 口 香代子

名古屋駅から東へ、鉄道で20分ほどの距離にある名古屋市緑区有松町。1608年（慶長13年）、東海道五十三次「鳴海（なるみ）宿」と「池鯉鮒（ちりゅう、現在の知立）宿」を結ぶ街道筋に新たにつくられたこの「有松」は、今年でちょうど開村から400年という節目を迎えている。この町の歴史は、そのまま伝統的工芸品産業のひとつ「有松・鳴海絞（ありまつ・なるみしぼり）」の歴史でもある。江戸時代、東海道を行き来する旅人が故郷へのお土産にと競って買い求めたのが、有松・鳴海絞の手拭や浴衣であり、その繁栄ぶりは、北斎や広重の浮世絵にも描かれた。そして現在、日本に210ほどある伝統的工芸品産業のほとんどが戦後の全盛期の8割～ 9割減という状況にある中で、有松･鳴海絞は4割減にとどまっている。愛知県絞工業組合の取り組みを中心に、有松・鳴海絞のこれまでとこれからを紹介したい。



〔写真上〕安藤広重作「東海道五十三次」鳴海の宿として描かれる名物有松絞り店の浮世絵図。実は鳴海の宿は、有松を描いたもの。（竹田嘉兵衛商店提供）〔写真下左〕伝統的な技法による有松・鳴海絞の生地　〔写真下右〕「新しい絞り」と呼ばれる生地でつくられたTシャツ（いずれも竹田嘉兵衛商店提供）

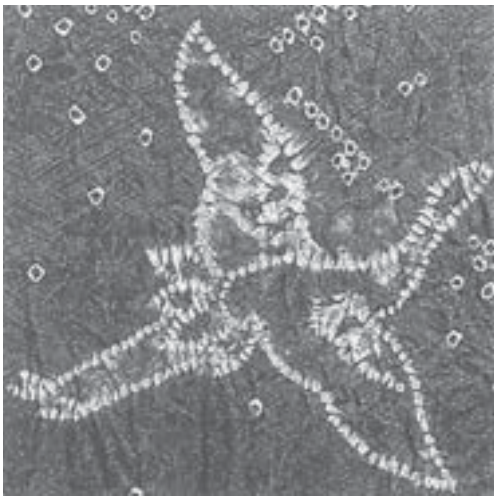
１.「有松・鳴海絞」とは

絞りは、最も古い染色技法

「有松・鳴海絞」は、簡単に言うと、生地に「粒」や「ヒダ」をつくり、その部分を糸で強くくくって染液につけ、シワやヒダにした部分だけを染めずに文様とする防染技術から生み出される絞り染め品である。防染技術としては、他に友禅などのような糊でやるもの、またロウを使うロウケツ染めなどがあるが、絞り染めは世界で最も古い染色技法である。日本では奈良の正倉院に遺品が残されており、６・７世紀ごろには既に行われていたことがわかっているが、世界的に見れば、その発生は紀元前まで遡り、世界各国でほぼ自然発生的に誕生したと言われている。

新しい町の誕生とともに始まった有松・鳴海絞

有松地域で絞り産業が生まれたのは、1610年（慶長15年）のこと。その２年前に、尾張の国、知多郡阿久比の竹田庄九郎という一人の若者が、仲間と力を合わせて東海道筋に新しい町「有松」を拓いたことに始まる。鳴海の宿と池鯉鮒の宿（現在の知立）の間にあったのが、尾張と三河の国境であり、織田信長と今川義元の「桶狭間の合戦」で名高い桶狭間。この古戦場跡は当時、人家もなく、松林の丘陵が連なるばかりの寂しいところであった。尾張藩の藩祖・徳川義直は、時々盗賊が出没するなど、旅人にとって非常に危険なこの地に町を拓くことで、その問題を解決することを考え、移住者には諸役などを免除する旨のお触れを出して移住を奨励したのである。



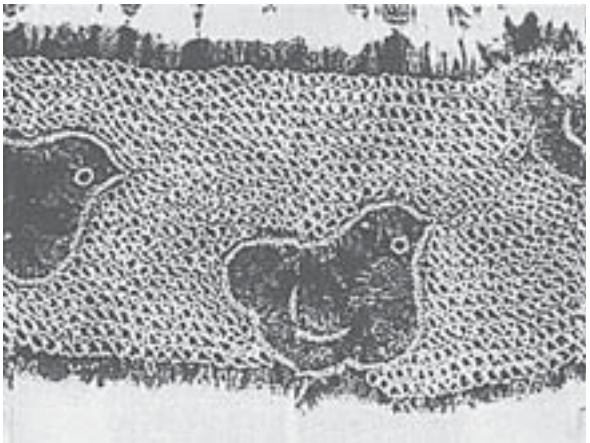
糸でくくった箇所は染まらず、それが模様となっている生地。（竹田嘉兵衛商店提供）

それに応えたのが、20歳の竹田庄九郎をリーダーとする８名の若者たち。桶狭間村の北側丘陵の谷間に「有松」を拓き、最初は農業による村づくりを目指した。しかし、開墾して間もなく、土地が粘土質で農業には適さないことがわかり、農業以外の生活の糧を必死に探す日々が続いた。

そんな中で、庄九郎たちが、なぜ絞り染めに着眼したかについては諸説あるが、庄九郎の子孫であり、現在、愛知県絞工業組合の理事長を務める竹田嘉兵衛さんによると、発想の原点は名古屋城築城にあったという。

その頃、名古屋城の築城が始まり、城普請の人足を集めているという話を耳にした庄九郎たちは、手間賃稼ぎに出かけて行った。そこで運命の出会いが待っていたのである。名古屋城の城普請には全国から20もの諸藩が借り出されたが、その中に九州豊後（大分）から来た人たちがいた。庄九郎の目を引いたのが、彼らが使っていた珍しい模様の絞りの手ぬぐいだった。東海道もだんだんと整備され、街道を行き来する旅人たちが日増しに増え始めていた頃である。「手ぬぐいは旅人にとって欠かせないもの。それを見たこともない美しい文様のものにして売り出したら、街道名物になりきっと売れるに違いない。旅の土産にも最適だ」と庄九郎は閃いたのだという。運も見方した。手ぬぐいの生地となる木綿は、国産品がちょうどそのころ生まれ、庄九郎の出生地である阿久比がその産地の一つであったので容易に手に入れることができたのである。

庄九郎はさっそく絞り染めの研究に没頭し、さまざまな創意と工夫を重ねた結果、現在でもなお「蜘蛛絞り」と呼ばれて伝承されている高度な絞り技法を開発（【代表的な絞り技法】参照）。庄九



江戸時代の有松絞の着物（折縫い紙巻三浦絞り）の部分。すでに優れた技法を駆使していた。（竹田嘉兵衛商店提供）

葛飾北斎が描いた、江戸時代の有松・鳴海絞の括り加工の様子。（竹田嘉兵衛商店提供）

郎は、これを当初「九九利染（くくりぞめ）」と名付けて、東海道を往来する人々に販売した。すると、庄九郎の思惑通り、瞬く間に旅人の間で人気となり、「尾張有松には摩訶不思議なる染物あり」と全国にその評判が広まっていった。その後、尾張藩の特産品として藩の手厚い保護も受け、華やかな元禄期には旅人がこぞって有松絞の手ぬぐい、風呂敷、浴衣などを買い求め、街道一の名産品として名声を高めていった。

一方、鳴海地区での「鳴海絞」は、江戸時代には藩の加護のもと、有松の業者が独占販売権を持っていたため、明治維新以降に本格的に生産されるようになったものである。以後は、両地区で有松･鳴海絞として産地を形成するようになった。

2.「有松・鳴海絞」の魅力

世界でも類のない 100種類もの絞り技法を考案

有松・鳴海絞が産業として発展してきた一番の要因は、「常に新しい技法の開発・探求を怠らず、ますます精巧にして華麗な文様を次から次へと編み出してきたこと」だと言われている。絞り染めは、絞りの仕方ひとつで、さまざまな模様を創り出すことができるが、有松・鳴海絞で考案された「絞り技法」は100種を超え、現在も70種以上の技法が伝えられている。これは世界中の絞り産地において類がない多種多彩さである。

一つの絞り製品は、今も変わらず「手しごとの競演」によって生み出される

有松・鳴海絞のもう一つの大きな特徴は、絞り染め産業全般にも言えることだが、図案から型紙彫り、下絵刷り、括（くく）り、染色、糸抜き（仕上げ）の各工程が分業化され、それぞれ専門の職人の手に委ねられている点である。有松・鳴海絞では、18世紀末から19世紀初めごろに分業制が確立されたと言われており、それぞれの見事な「手しごと」の競演によって一つの絞り製品は誕生する。これは今も変わらず、例えば一反の着物が出来上がるまでには、括り工程だけでも４、５人の職人に回されることも多く、一年あまりの歳月がかかる。（【有松・鳴海絞ができるまで】参照）

「一人一芸」が醸し出す 繊細で豊かな味わい

絞り技法の核となる「括り（くく）り」は、技法の種類によって加工方法も使う道具も異なる。しかし道具といっても、小さな台や糸を巻きつける小さな棒、針など、実に簡単なものでしかなく、まさに両の手のみを働かせて非常に緻密で細やかさが要求される技法を習熟し、技術を施すのである。特に、有松･鳴海絞は、先に紹介したように、

世界でも類をみない100種類にも及ぶ括り方を考案してきたが、同時に技術の確かさを最も大事にしてきたために、それぞれが習い覚えた一つの技術を最後まで追い求めるという人材育成が自然と行われてきた。つまり、各技術者が「一人一芸」の技術を持って作業を行っているのである。その多くは家庭の主婦で、母（義母）を師として、家庭内で見様見まねで覚えていく中で技術の伝承が行われてきている。

竹田理事長によれば、「これが、有松・鳴海絞が一つの大きな地場産業を形成し発展してきた特徴であるとともに、一方で後継者がいなくなると、技法そのものが途絶えてしまうという、伝統を守るためには困難な面を合わせ持つことにもなっている」のである。

３.「有松・鳴海絞」の今

1967年に愛知県絞工業組合を設立

有松・鳴海絞は、明治維新によって、一度繁栄の頂点から一気に滑り落ちたが、また持ち直し、第二次世界大戦が起こる昭和の初めまでは産業として順調に発展を遂げてきた。戦争によって物資が統制され、製品に必要な木綿の入手が困難になったことで、一時的に衰退したが、しかしそれも戦後の復興期、高度成長期を通じ、国民生活が豊かになると、伝統的な絞りの良さが再び見直されるようになり、安定した産業形態を保ってきていた。

1967年（昭和42年）には、「愛知県絞工業組合」を設立（設立時会員：129名）。これは当時、韓国から絞りが大量に輸入されるようになったことへの対抗策として、有松・鳴海絞だけでなく愛知県全体で絞り染めに従事している人たちによってつくられたものである。別に、有松・鳴海地区では「有松絞商工協同組合」と「鳴海絞商工協同組合」も存在する。1975年（昭和50年）には、通産省（現・経済産業省）より「伝統的工芸品産業」の指定を受けている。

そんな有松・鳴海絞も、昭和50年代に入ると、関係者が産業としての存続の危機をひしひしと感じるようになっていく。日常生活における和服離れがその大きな要因。廃業した絞り業者も多く、現在、愛知県絞工業組合の組合員は30名（社）。設立時から考えると４分の１にまで減っている。メーカーの所在場所としては有松と鳴海が中心で、組合員のほとんどは有松・鳴海絞の従事者である。

50代以下の若手組合員による第一回「国際絞り会議」の開催

1980年代後半になっても状況は全く好転しなかった。「場当たり的な対応策は本当にいろいろやりました。例えば、今年のパリ・コレクションの流行色は赤だから、その赤で振袖、浴衣をつくってみようとか。しかしやってもやってもなかなかうまくいかない」（竹田理事長）。

そんな中、組合の若手（50代以下）が集まった席で、一度ゼロに戻る取り組みをやろうという話が出る。対処法を求め、結論を出そうというものでなく、これからどうすればいいかを一から考え直せるものを。そうして取り組んだのが、名古屋市での「第一回国際絞り会議」の開催である。

その経緯については、後の竹田理事長へのイ

【愛知県絞工業組合　概要】

所 在 地：
〒458－0901
愛知県名古屋市緑区有松町橋東南60－1
（有松・鳴海絞会館内）
TEL　052－621－0111
組合員数：30名（社）
（愛知県内で絞り染めに従事している事業者）
地域ブランドに認定されたブランド名：
■有松・鳴海絞
■匠・有松鳴海絞

ンタビュー記事で紹介するが、1992年11月21日～23日の３日間、有松・鳴海絞の関係者が主催者となり、世界20カ国から絞りのデザイナーや研究者を呼んで、パネルディスカッションやファッションショー、ワークショップなどを開催した。実は、絞りをテーマに世界の関係者が一堂に会するのは、これが始めてのこと。参加者は850人にのぼり、うち海外からが150人、これに一般市民も加わり、結果的に10万人規模の盛大なイベントとなったのである。これによって、有松・鳴海絞を世界に広く知らしめる成果も得たことはもちろん、３年に及ぶ準備段階において、世界各国の絞り関係者とシンポジウムに向けた話し合いを重ねる中で、「絞りの新しい方向性」を生み出す一つの大きなヒントを得たのである。

「シェイプド・レジスト・ダイング」という発想

「絞りは世界にあり、紀元前から続いているのは、何か他にはない非常に優れた魅力があるからではないか？」という議論が発端となり、「絞りとは何か？」についてさまざまな意見が出る中で、アメリカのスミソニアン博物館の研究員から出たのが「シェイプド・レジスト・ダイング（Shaped resist dyeing）」（立体的に防染された染め物）という概念。絞りによってできる「シワの造形の美しさ」にスポットが当てられたのである。それまで「絞りは模様をつくるための防染技法」と捉え、染色後にできたシワは湯通しし伸ばして製品化していた絞り事業者にとっては、発想の大転換を促される概念だった。

伝統がハイテク技術と融合し、今までとは全く違う「新しい絞り」が誕生

その概念のもと、今、有松・鳴海絞で取り組まれているのが、「形状記憶」技術を使った「新しい絞り」である。絞り製品は、シワを伸ばす工程を行わなくても、時間が立つと染め上がったばかりの時の美しい立体的なシワはなくなる。そこで、一番美しい状態で絞りの凹凸を維持させるために、形状記憶加工技術を利用し、絞りのシワの造形を固定化することに成功したのである。そして、三宅一生をはじめ日本の有名デザイナーたちがパリコレなどでこの布を使って作品を発表したことで、「新しい絞り」に世界のアパレル・ファッション業界の注目が集まることとなったのである。

「匠・有松鳴海絞」ブランドによるクールビズ製品の開発

もう一つ、愛知県絞工業組合として、今年、新たな展開をスタートさせた。絞り製品の紳士衣料への本格的活用への着手である。その一つが「匠・有松鳴海絞」ブランドによるクールビズメンズ

「新しい絞り」を使って有松・鳴海絞の業者によって商品化された[POCKETEE（ポケッティ）」シリーズ（竹田嘉兵衛商店提供）

シャツの開発である。

実は、愛知県絞工業組合では、2006年にスタートした、通称、地域ブランドと呼ばれる特許庁による地域団体商標認定制度(注1)において、「有松・鳴海絞」として地域ブランド認定を受け、これを活用した展開を模索していたが、なかなかうまい展開を図れていなかった。「有松・鳴海絞」ブランドの定義は、企画と染め工程などの最終加工については有松・鳴海地域で行い、一部、絞りの工程などは中国など産地以外でもOKというもの。すでに多くの有松・鳴海絞業者にとって、「100％有松・鳴海製」というのは難しい状況になっていたのである。しかし一方で、デパートなどでは、産地表示が厳しくなり、「100％日本製」かどうかが、消費者の購買行動を決める一つの大きな決め手にもなっている。そこで、愛知県絞工業組合では、その後スーパーブランドとして100％有松・鳴海地区製の「匠・有松鳴海絞」を地域ブランドとして申請し、認可を受けた。

この「匠・有松鳴海絞」を活用し、2007年７月に、有松・鳴海絞としては初の本格的なメンズ商品の開発として、クールビズプロジェクトをスタートさせたのである。そして今年、瀧定名古屋株式会社の協力を得て、組合加盟の絞りメーカーが企画した30点のうち、８社が手がける24点のメンズシャツが松坂屋名古屋店の紳士服売り場の店頭に並んだ。

〔注1〕これまで非常に厳しかった「地域名と商品・サービス名」が結びついた商品の商標権の登録要件を緩和し、地域の活性化などに役立てようという新しい制度が2006年４月１日の商標法改正によりスタート

SPA戦略による販路拡大にも挑戦

さらに、ブランド力を高めていくために、日本の伝統の軸線上にあるモダンデザインをコンセプトに国産地下足袋、和服、家具、雑貨の製造、販売を手がける京都の「SOUSOU」とのコラボレーションを現在展開している。これは伝統をベースに優れた絞り技術を生かし、現代に融合したデザインに変化させ、従来にない新しい有松・鳴海絞の商品開発を行おうという戦略である。2006年11月に京都市内で展示会を開催し、有松・鳴海絞の新しい姿を多くのバイヤーや一般消費者に印象付けた。また、家庭画報特選「温もりのある快適生活道具」2008年夏号というカタログで、SOU・SOU×有松鳴海絞の手ぬぐいシャツを販売。従来の流通に加え、新しい有松鳴海絞のSPA(注)戦略としての販路拡大も図っていく方向だ。

（注）ＳＰＡとはspecialty store retailer of private label apparelの略で製造小売ともいう。企画から製造、小売までを一貫して行うアパレルのビジネスモデルを指す。

４．有松・鳴海絞のこれから

インタビュー

愛知県絞工業組合
理事長　竹田 嘉兵衛　氏

あえて、ドンキホーテになる

―まず、1992年の「国際絞り会議」の開催が、有松･鳴海絞にとって､かなり大きな転換点になったようですね。理事長は、その実行委員長も務められたわけですが、50歳以下の組合員での主催にするなど、その経緯に興味があります。

竹田　我々は若手と呼んでいるのですが（笑）なぜ、50歳以下だったかというと、これからまだ20年ぐらいは、この仕事で食べていかないといけない面々ということです。日本人の和服離れに加え、

メイドインチャイナの安い絞り商品が市場に氾濫しはじめ、我々にとってはどんどん需要が狭まっていく状況に、正直、なす術がなかった。場当たり的な対応策ではもうどうしようもなくなっており、何とか突破口を開きたかった。

―しかし、いきなり「国際絞り会議」の開催というのは、実に思い切った行動ですね。

竹田　実は、最初は、作家さんたちが言い出したのです。世界のテキスタイルの作家が集まって会議をやろうじゃないかと。しかし、作家さんたちは、組織力がないので、「地元のみんなで手伝ってほしい」という話になり、私も借り出されたわけです。そして、組合という組織力でやろうとなり、お前が一番年上だから、実行委員長をやれということになった。企画が始まった時が49歳、ぎりぎり40代（笑）でした。しかし、国際会議などに一度も出たことがない面々が主催をやろうというわけです。今、考えると、本当に無謀なことだったと思いますが、名古屋観光コンベンションビューローをはじめ、いろいろなところが応援してくれました。

想像もしていなかったところにあったヒント

―国際絞り会議は、その開催そのものが、有松・鳴海絞の活性化にとって大きなインパクトになったようですが、「これから」についての大きなヒントも得られたようですね。

竹田　シンポジウムで「シェイプド レジスト ダイングShaped resist dyeing」（立体的に防染された染め物）という、全く新しい概念が生まれたことはもちろんですが、私が非常に良かったと思うのは、当日のシンポジウムに向けての予備の話し合いでああでもない、こうでもないと議論された内容。パネリストたちに混ざって、我々もその話し合いに立会い、聞かせてもらったのですが、実は、「シェイプド レジスト ダイング」以外にもう２つ、「絞りとは何か？」「絞りの魅力とは何か？」についてキーワードが出てきたのです。

「シェイプド レジスト ダイング」に関しては、絞りは、例えばくるくると巻いても凸凹になるし、チクチク縫ってキュッと引き締めても凸凹、生地をたたんでぎゅっと抑えても凸凹になる。ようするにシェイプであり、立体的に防染されたものというのは絞りしかないということでした。結果的には、このシェイプド説が皆さんの大勢を制して、第一回国際絞り会議での結論として、これを採用しようということになったのですが、実は我々絞り業者にとっては、当初、これへの反発心が少なからずあったのです。

―それは興味深いお話ですね。

竹田　シェイプド説を提唱したスミソニアン博物館の研究員は、大変有名な染色の研究家ですが、我々としては「生地をデコボコにするために絞っているわけではない。絞りをなめているのではないか」という思いがどうしてもあったのです。それに対して、他の２つのキーワードは、一つは「グラデーション・オブ・ダイング・エッジ」で、つまり染際のボケがきれいだということ。そしてもう一つは「トランスペアレンシー」、光が通った時きれいだよねというものでした。この２つの方が我々にとってはうなずけるものがあった。もち

市指定有形文化財の竹田家住宅。母屋は江戸期のもので、絞問屋の伝統的形態を踏襲している。（竹田嘉兵衛商店提供）

ろん、体験的には、シェイプド説はわかるのです。染めて乾かして糸を抜いて広げた時のあの立体感は確かに美しい。しかし理屈ではそうで、芸術品をつくるのならいいけれど、その立体感は継続するものではなく、すぐに伸びてしまうもの。だから実用品にはならないと。コチコチ頭でしたね(笑)。

―形状記憶という技術が、それを可能にするわけですね。しかし、当時はまだ一般には形状記憶製品は市場に出ていませんでしたね？　どうやって結びついたのでしょう？

竹田　実は、その会議には、ISSEY MIYAKEのテキスタイルデザイナーである皆川魔鬼子さんも参加していただいていたのです。彼女が「私が使っている形状記憶という技術を使えばいいじゃない」と。最初は、「形状記憶、それは何ですか？？？」という感じでした（笑)。我々伝統産業をやっている絞り屋ですからそんなこと知らないわけです。ちょうど、三宅一生さんのプリーツ・プリーズが出てきたころで、皆川さんは、「ヒートセットと言って、ポリエステルの生地だったら熱と圧力をかけたら形状を記憶する」とおっしゃる。半信半疑で皆川さんに教えてもらってやってみたら簡単にできてしまったのです。結局、それを皆川さんが持って帰り、一生さんがパリコレで使ったら、ものすごく人気を博したというわけです。

また、1999年に、ポリエステルのブラウスに三浦絞りをかけて、当社独自で商品化し、アメリカで販売した「ポケッティ」という形状記憶絞りTシャツは、来るバイヤーがみんな買ってくれるというほどの状況で、売れに売れたのです。最初は当社が始めましたが、絞り会議に関わった人は誰がやってもいいということにしていたので、売れた時には、これで有松・鳴海絞は万々歳だと思ったのですが、簡単にはいきませんね、物事は。

―何があったのでしょう？

竹田　１年も立たないうちに、欧米の複数の大手ファッションチェーンに中国製の模倣品が出回ったのです。製法特許は取得していたものの、見てすぐ分かるデザイン特許でなく、製法特許であるため、模倣品が同じ製法で作られた物であることを証明する必要があり、訴訟に時間がかかるといった問題から、訴訟を断念。しかし、この結果は、決して無駄ではありませんでした。「シェイプド説」はやはり正しかったことが証明されたのですから。そして私は次のように理解したのです。

絞りの新たな可能性の扉は、光の波動に着目するところにある

竹田　シェイプド説からわかるのは、絞りが「光の波動」をうまく取り入れることができる製品であるということです。物の形を私たちが認識できるのは、どこかから光がきて、それが物にあたり、その光の波動が人の目に入るからです。平らなものからくる光の波動より、凸凹なものからくる光の波動の方がより複雑で、それに人は美しさを感じます。これは、グラデーション・オブ・ダイング・エッジというキーワードにも言えることです。藍染を例にとると、本物の藍染の染料で染めたものと科学染料で染めたものでは、小さいもので染めると同じ色に見えるけれど、１～２ｍぐらいの大きさでは誰が見ても違う色に見えます。どちらがいいというと、たいてい本物のほうがいいと皆さん言う。値段からいうと本物は何万円もし、片や科学染料ものは何百円という違い。しかし何万円でも本物は本物で売れる。これはなぜかというと、顕微鏡で見ると科学染料は100％藍の色であるのに対し、天然染料で染めた藍というのは、まず、まともに染まっていないのです。顔料みたいなものが生地の表面に付着している。さらに色も黄色、赤色、紫色といろんな色が入り混じって、最後に藍色に見えているという具合。工業製品からいえば、不良品のようなもの。しかし、その不

良製品から出てくる光の波動は100％完璧なものから出てきている光の波動よりも人間の目には美しく見えるわけです。これが、私が考える「光の波動説」です。そして、これが、絞りが生き残る大きな鍵を握るのではないか。

―非常にわくわくするお話。それに着目した今後の展開が非常に楽しみですが、それとともに、有松では今年、開村400年を迎え、「有松開村400年記念事業」を展開されていますね。有松400年の歴史は、まさに絞りの歴史であると言っても過言ではないと思います。

竹田　今年いっぱい、まだまださまざまなイベントを開催します。詳しくは、私どもに問い合わせていただいても「有松開村400年記念実行委員会」に問い合わせていただいてもいいですし、ホームページでも紹介しています。有松は、1784年（天明４年）の大火で村の大半が焼けましたが、尾張藩の手厚い庇護と村人の努力で防火に配慮した総瓦葺・塗籠造りとし虫籠窓・海鼠壁・卯建を特徴とした街並みができました。今も、旧東海道沿いに当時の面影を残した江戸時代の建物が面として存在する日本で唯一のまちです。有松・鳴海絞会館では伝統工芸士による絞り技法の実演もやっており、絞り教室も開いています。ぜひ、この機会に来ていただければと思います。

結びにかえて

絶えず新しい試みに挑むことが、伝統を継承させる

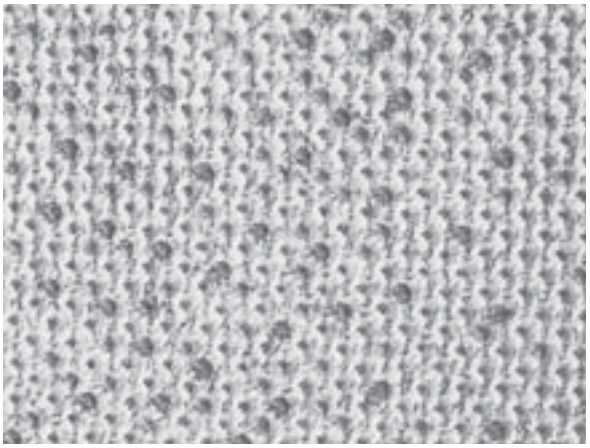
取材の翌日の朝、新聞をめくっていると、「有松・鳴海絞 トレビアン！」という見出しが目に飛び込んできた。中日新聞の地域版に掲載されたその内容は、パリで今春開かれた世界最大級の生地見本市に、有松・鳴海絞の浅井絞商事が、一宮市大和町の生地卸製造業、中外国島と共同開発したウールの絞生地を出展したところ、ブースを世界各国のデザイナーやモード関係者が取り囲み、サンプルの争奪戦だったとあり、「低落傾向が続く絞産業にとって、世界ブランドへの突破口になる可能性もあり、業界の期待が集まっている」と紹介していた。「絞生地は従来、木綿と絹しかなく、現地では日本的な繊細な感性に加え、素材の柔らかさと温かさ、縮み具合や立体感が着目された」という。

国際絞り会議を機に、この地で起こっている「新たな絞り」への取り組みは、世界を巻き込んだ非常に面白い展開を起こしそうだ。国際絞り会議自体も、その後、継続されており、今年はフランスで第７回目が開催される。

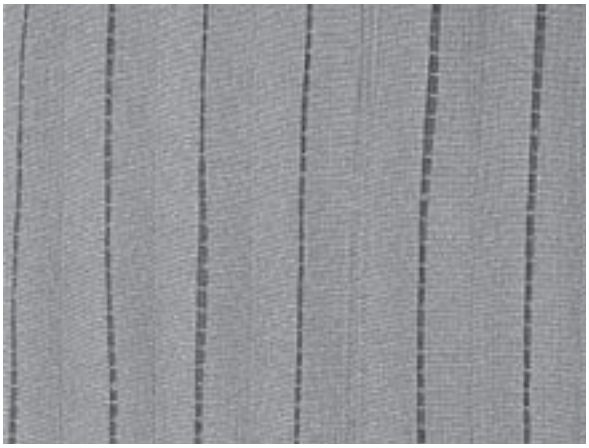
実は、有松・鳴海絞の開祖・竹田庄九郎は、「伝統は、たえず新しい試みを繰り返すことによって継承させる」という教訓を残している。無謀とも思えた国際絞り会議の開催に挑んだのも、さらに次の時代に向けて伝統を大事にしつつ「新しい絞り」に挑むのも、その教訓がこの地に息づいているからかもしれない。

竹田嘉兵衛商店提供

【代表的な絞り技法】

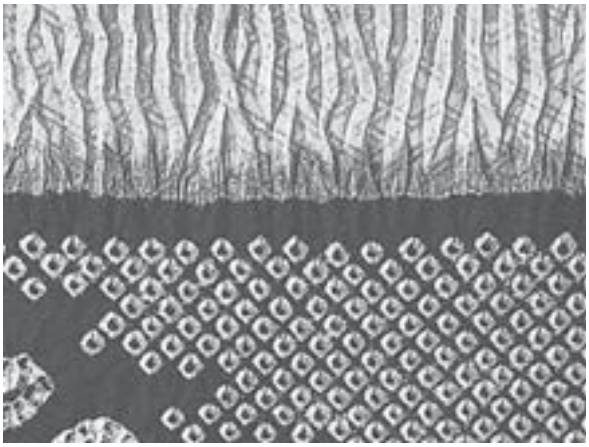


■鹿の子絞り
染め上がった模様が鹿の斑点に似ていることから名付けられ、絞りの中でも最も高尚で、繊細、豪華である。

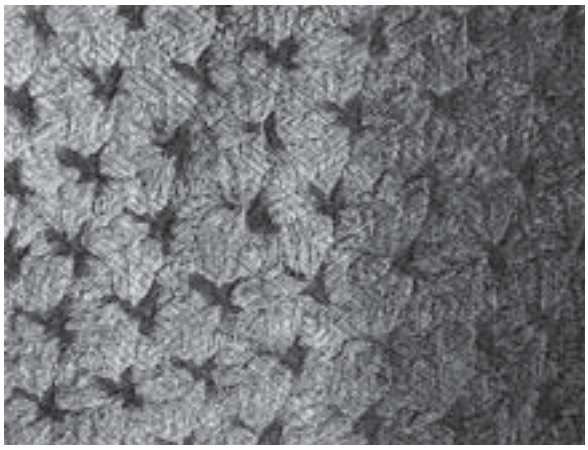


■手筋絞り
生地を細かくたたみヒダを取って幾十本かの筋目を立て、絞り上げて柄を出す。手先のカンで作業を進めるため熟練を要する難しい技法の一つ。

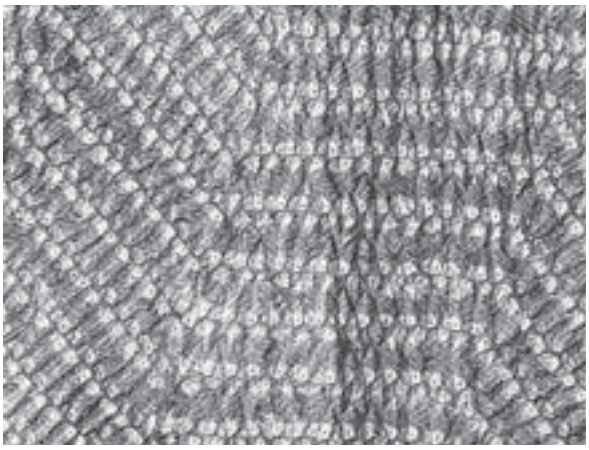
■蜘蛛絞り
専用の鉤針に生地を引っ掛けてヒダを取り、シワを寄せて根本から絞る技法。蜘蛛の巣状の模様が生まれる。



■桶絞り
色を大きく染め分ける絞り技法の一つ。直径40cm桶の中に染めない部分の生地を詰め込み、染め分ける。



■三浦絞り
庄九郎がヒントを得た豊後（大分）の医師三浦玄忠の夫人が有松に伝えた技法。鳥や貝の剥き身のような形の模様が特徴。



■縫い絞り
生地に絵刷りしてある線または輪郭にそって普通に布を縫うように木綿針を細かく運び、締めた後は、結び玉を作って解けないようにする。

（写真提供：竹田嘉兵衛商店）

【有松・鳴海絞ができるまで】

工程1　図案・企画

時代の消費者嗜好と流行を考慮し、伝えられた膨大な意匠雛形を参考にしながら図案を作成。

工程2　型彫り

図案をもとに、小刀やハト目抜きで、模様を切り抜いたり穴をあけたりして型紙をつくる。

工程3　絵刷り

型紙を白生地の上に置き、刷毛で青花液を刷り込んで図案を写す。

工程4　括り（くくり）

現在も70種類以上ある絞り技法は、その種類によってそれぞれが専門職化しているため、通常4～5人の家庭（職人）へ次々と回されて加工される。写真は手筋絞りの制作風景。

工程5　染色

専業の染屋によって各種の染色が行われる。括り糸が解けぬよう、糸切れしないように細心の注意を払うとともに、薄すぎず、濃すぎず、タイミングを見計らって引き上げることがポイント。

工程6　糸ぬき

絞りの種類(括り方）によって糸のとき方が違う。絞り染めは糸を締めることによって防染し複雑な文様をつくりだすため、一反に10日以上要することもある。

工程7　仕上げ

反物として巻かれる仕上げと、仮縫いして図柄を合わせる絵羽仕上げがある。